

J-47

演じるまち

まちのためにまちが演じるまちの未来

ennjiru mati

The future of the town which a town performs for a town

佐藤信治¹, ○山川 大喜²

Shinji Sato¹, *yamakawa hiroki²

There is a difficult town to leave as a form reminiscent Osare, former a wave of redevelopment. Yotsuya Araki town. It is said that was milling around and about 80 hotels of the geisha shop around the beautiful pond in this town was the red-light district in the past. However, geisha house is no longer with the decline of the pond. Vestiges of the red-light district is to remain here and there, but still, Osare the wave of redevelopment, the remnant is also on the verge of crisis.

A difficult town to leave as a form remnants Osare, once the wave of redevelopment like this, we propose the way of the town that can remnants continue to inherit the form of the town is reproduced, Kaware.

1. はじめに

再開発の波におされ、かつての面影を形として残すことの難しいまちがある。四谷荒木町。かつての花街だったこのまちには美しい池を中心におよそ 80 軒もの芸妓屋がひしめき合っていたといわれている。しかし、池の衰退とともに芸妓屋はなくなっていく。今も花街の面影がちらほらと残ってはいるが、再開発の波におされ、その面影も危機に瀕している。

このような、かつての面影を形として残すことの難しいまちで、まちの形が変われども面影は継承していくことのできる、まちのあり方を提案する。

2. 計画背景

2-1. 四谷荒木町

外周を高さ 8~11m の崖で囲まれたすり鉢状になっており、現在でも周囲のほとんどが階段となっている。その中心にはかつて、美しい滝が水を注ぐ池が存在していて、この池の周りには花街が栄えていた。しかしこの池もいまは 1/10 程度に縮小してしまい、周囲に栄えた花街もちらほらと面影を残すのみとなっている。このまちでは、特異なすり鉢状の地形と、かつての花街の面影を愛するまちの人々と再開発の波とがぶつかりあい建築紛争が起きている。かろうじて面影は残されているが、開発を拒否しつつ、拒否しきれない現状はこのまちの未来を想像すると良い状態とはいえない。そして近年の都心の再開発・木造家屋の老朽化・空き家の増加は、さらに状況を悪くしている。形として残すことが難しくなっている。このまちには早急に形としてではなく、別の方法での面影の継承の仕方とまちのあり方が求められている。



figure. A place with construction-related dispute

2-2. 策の池

江戸時代、荒木町は街全体が松平摂津守の屋敷の敷地だった。その中にあった庭園の中心にあったのが、策の池である。池の一角に天然の滝があったことから明治初期には茶屋が出来、観光名所となった。周囲の急速な都市化で明治後期には既にほとんど枯れていたという。現在は長さ 10m 弱、幅 5m 弱の小さな池だが、かつては長さ 130m、幅も 20~40m ある大きな池だった。この池は荒木町の歴史そのものであるため、小さな池となった今でも象徴となっている。



figure. It is the this 1 Tokyo figure survey original drawing for 5000 minutes.

1 : 日大理工・専任講師・海建 Department of Oceanic Architecture & Engineering , CST. , Nihon-U.

2 : 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture & Engineering , CST. , Nihon-U.

2-3. まちと演劇

情報があふれる時代、人々の心を動かすのは、情報自体というよりも情報を通じたコミュニケーション、つまり体感することが重視される時代へと変化してきた。体感することが重視される時代へと変化しているいまだからこそ、人と人とが直接向き合える「演劇」に目が向き始めている。「演劇」といえば劇場へ足を運び、観に行くものとなっている。しかし本来の「演劇」の姿はこれだけでなく、まちのあらゆる場所で小規模で行われ、小さなコミュニケーションの場としての姿もあった。そのため、まちと「演劇」はとても近い存在であった。

2-4. アーティスト・イン・レジデンス

国内外の芸術家をひとつの地域に一定期間滞在させて、創作活動をさせる制度や事業である。このプログラムを演劇のみで行う。自立演劇の実践をおこなっていた三川八十一が有鳥武郎の脚本「ドモ又の死」をおこなったときに「人は常に誰でも表現しないではおれない何かを持っているが、あの脚本にはぼくたちが今日是非とも表現しなければいけないなにかがないのだ」といっている。つまり自分の経験からあまりにかけはなれた脚本では魂がこもらないということである。演劇者はまちに住み、まちという近い距離でまちを演じることで演劇における魂を磨くことができる。

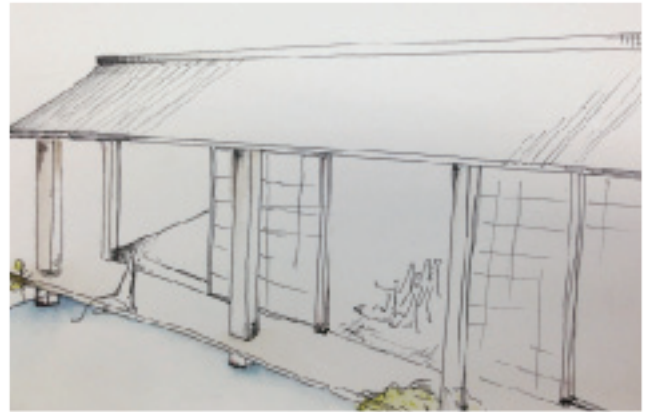
3. 基本計画

かつての面影の継承を演劇で行う。敷地の中心にある歴史の詰まった池を守るために劇場を、面影の残る場所に舞台を、空き家や老朽化した家屋を演劇を行う者が住む場所として計画する。

4. 建築計画

① 最低限、形として残すべき場所を選定し、その場所に計画の中心となる劇場を計画する。

– 中心の池はすり鉢状の敷地の象徴であり、この土地の歴史の詰まった場所として決して失ってはいけないものである。そのため、存在を残す目的として核となる劇場を計画する。劇場は屋根でつながった長屋のような形態で、花街の芸妓屋を思わせるようにいくつかの舞台にわける。池側は縁側のように開き、池は雨によって広がる事を予想し、ときには劇場が水上にくるように計画する。さらに屋根は内側、池側へと流れ落ちるように片流れの屋根とする。すり鉢状の地形の底となる場所なので高層とせず、全体からすぼむ形となるようなイメージとする。計画の中心であり、終わりとなる劇場を計画する。



figre. Theater Perth

②ほか、面影を残す場所をいくつか選定し、その場所に舞台を計画する。このとき舞台は仮設とする。仮設にする理由としては、演じている時だけその場所に舞台があることで、その瞬間を特別なものとするため。そして形として残すのではなく演劇として残すことで消えることのない記憶とするためである。

– たとえば花街を思わせる以下の石畳と街灯。それぞれ花街の名残として、その時代を演技で再現する。はじめは形としての面影と演技で花街の時代を創出する。やがてこれらはなくなるかもしれないが演技は消えず、今度は演技によって面影を創出する。



figre. The stone pavement in every place of a back alley



figre. A characteristic streetlight

5. 参考文献

- [1] 五千分之一東京図測量原図 東京府武蔵國四谷区四谷伝馬町近傍
[2] 日本建築学会計画論文集 建築紛争時における住民と開発業者の折衝の経緯と論拠